

慌てて肩を掴むのに逆らつてうぐーっと頑張る。冷たいつめたい雪の大地。冷える。ひえて痺れて、溢れそうになったこの涙も凍らせて欲しい。だつてアッシュは同情なんか必要ない。自分なんか本当は要らないつて知っている。

孤高の人、というかもしれない。

ルークの知るアッシュは昔跳ね除けられた手の痛みが消えなくて、それならいっそ全てがいらぬように生きようとしているように見えた。その全ての中に、ヴァンだけがきつと含まれていなかったのに、自分はそのあるべきだからとそのヴァンすらきり捨てて。敬愛すらなかつたものとして。

孤独だなんていいたくなくかつた。孤高という言葉すら、失礼な気がした。一人で完成している存在なんて言い方はルークが寂しかつた。見ていると心臓が痛いんだ。自分はアッシュのレプリカだからそう思うのだと信じていたけれど、他のレプリカを見てそうじゃないということを知つた。あるいは完全同位体だからかもしれない、という推測が思考のどこかを掠めたけれど。そんなこと些細な違いじゃないかと苦笑する考えもまたあつた。

自分が、何にも引きずられない自分が、一人であるうとするアッシュに対して苦しさを覚えていたのだと。いい加減認めるべきなのだ。

パチカルの廃工場。薄く汚れた空気。油の胸が焼け

るような臭気。むつとする、質量のある酸素。外は雨が降っていて。入り込むのに躊躇つた。

彼の記憶ではこの先にアッシュがいるはずで。

また、繰り返すのだろうか。あの憎しみにギラついた眼差しを受け取るべきなのだろうか。あの、一人であることに慣れてしまっている、乾燥してひび割れた、眼差しを。

苦しくなつて怖くなつて立ち止る自分をとがめる者は誰もいなくて。かえつて、立ち止れなかつた。平気なふりをして。立ち上がる。しゃがみかけていた体を叱咤して、進む。無明のように濃い世界の先に。紅蓮の色彩が見えた瞬間。全てが翻つたのを思い出す。危惧なぞもうどうでもいい。

両手にずしりとした重みを感じてこのままこいつと消えていくんだと思つていた。

自分は巻き戻つたけれど、相手はあのまま、相手だけが独りであのままほじめて消えたんじゃないかって怖かつた。

だからこそ、色あせない赤色。血色。鮮血。燃え上がる炎より尚濃い赤。翻る、鮮やかな紅蓮！ それを見た瞬間、全てが吹き飛んだ。生きている。それだけでもういい。まだ間に合うはずだ。たといアッシュが他の仲間たちとは違つて、自分とは違つて、全てを覚えていないとしても。

もう死なせるつもりはない。